

教えて!


市立病院

vol.53

市立病院総務課企画財務担当 ☎ 22-2450

テーマ

お年寄りに寄り添った大腸がん治療



今月のドクター
外科兼
内視鏡外科長
佐藤佳宏 医師

大腸がんは、食事の欧米化の影響で増加傾向にあります。大腸がん検診では、65歳以上で発見率が高く、75歳以上でさらに高くなります。一方、がん医療の進歩は目覚ましく、早期発見できれば治る病気になりつつあります。早期治療は負担が軽減するため、高齢者ほど検診を受けるメリットが大きく、毎年検診を受けることをお勧めします。

外科では担当医師が外来初診から診断、治療、在宅治療そして看取りまで一貫した治療を行っています。

がんを告知するときには看護師が患者さんのお話を聞き、思いを受け止め、うつ傾向が強い場合は専門的なチーム医療で対応します。

治療は、大きく分けて内視鏡的治療、手術、抗がん剤、放射線治療を選択して行います。このうち、内視鏡的治療や手術は病変を切り取るもので、比較的症^{びょうへん}状が進行していない段階で用いられます。場合によっては手術前2週間程度、栄養状態を改善する治療やリハ

ビリを行うこともあります。

当院で力を入れている^{ふくくうきょうか}腹腔鏡下大腸切除術は、開腹手術と比べて傷口が小さいため痛みも少なく、退院までの期間も短くなります。

手術後は、離床や歩行、口からの栄養補給を促進するなど、合併症予防と早期退院に努めています。高齢者は、いったん合併症が発症すると回復に時間がかかり、生活の質が著しく低下しますので、予防が重要です。

退院後は、住み慣れた家で今まで通り暮らせるように支援し、日常生活での動作の程度や栄養状態が保たれるよう往診しています。病院では見られないような患者さんの一面を見ることもあり、一貫してその人の生き方にあった治療に努めています。

詳しくは8月19日(土)に開催する市民公開セミナーでお話しますので、ぜひお越しください。

※開催内容は14ページをご覧ください。